

# たぐみ

## CraftsmanShip

特集 一みちのくの手仕事ー東北の民藝展

第49号

### 『手仕事の日本』いま

先ごろある出版社の方がみえて取材を受けた。いま再び『民藝』のブームで、今回は柳宗悦の名著「手仕事の日本」(昭和十八年・一九四三正月脱稿)に焦点をあてて、いま果たしてどれほどの手仕事が残されているのか掘り起こしてみたいということであった。

そういう取材は多く、いま第三次のブームといわれることもあつて戸惑うのだが、作り手をはじめ携わる者たちにとって、必ずしも実感はない。

筆者がたぐみの仕事にかかわることになった昭和三十年代は、手仕事が、旧来の地方の伝統的工藝や山村の残存民藝品から、都会の生活に適した新しい生活工藝を生み出そうとする、いわば過渡期であつたといつていい。だが戦後の復興がようやく軌道に乗りつつあつたとはいえ、民藝品の集荷は「手仕事の日本」執筆のころとそう変わりはなく、夜行寝台とローカル線と徒歩

が主な交通の手段の時代でもあつた。

しかし他方で柳をはじめとする民藝協会の仲間たちは戦後すぐから地方の民藝の復興に心を寄せ、特に沖繩の工藝や、八丈島の黄八丈の再興をはじめ、新しい工藝としては、芹沢銈介を中心とする型絵染めの仕事、岩手のホームスパンの織物、鳥取の織物、陶器、和紙、新作家具や、松本民藝家具の仕事などが注目された。

ところで今から十八年前、日本民藝協会の事業として「手仕事の日本の今」という企画で、手仕事調査と資料作成をしたことがあつた。そして翌年の協会全国大会にあわせて有楽町阪急で「手仕事の日本・ふたたび展」を開催した。

そのおり先ず基礎資料として、柳本やなぎもとを底本とする『手仕事の日本』記載・民藝品索引やなぎものしるしを作製した。北は北海道から南は沖繩まで、総数八四〇点余り、日本の手仕事の、あらゆる分野を網羅したものであつた。

(十二頁に続く)

たくみ企画展

# ―みちのくの手仕事― 東北の民藝展

会 期 十月二十三日(土)～三十日(土)

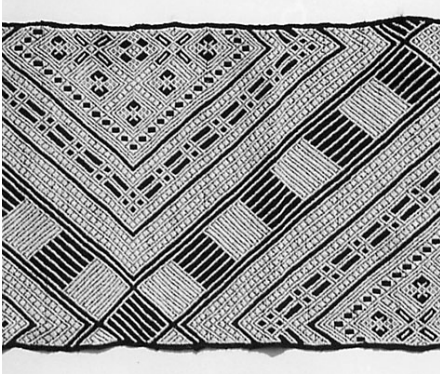
十月二十四日(日)は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで(日曜日・最終日は十七時半迄)

みちのくの手仕事のなかで、柳宗悦  
がまずとりあげたのは津軽の刺こぎん  
と南部の菱刺しでした。このふたつは

藍染めの麻布に木綿の白糸で模様を刺  
した日常用の刺子着でした。寒冷地に  
もかわらぬ庶民は木綿の着用を禁じ



刺こぎん テーブルセンター部分 (青森県)



横手鍛冶 燭台2種 (秋田県)

られたため、自家で織った麻布に木綿  
の糸を刺すことで寒さを防ぐ方法が工  
夫されたのでした。

津軽の刺こぎんは藍染の麻布に白糸  
で刺したもので、仕事着を兼ねた上着  
が主であります。同じ青森でも南部地  
方は色糸も用い、主に前掛けに用いら  
れます。いずれも麻布の織目に決めら  
れた数式で糸を刺しますが、それだけ  
にその美しさはほかに類を見ません。

みちのくの手仕事は、寒さと積雪と  
いう風土の制約があるため、材料にも  
形態にも固有性があつていまなお人び  
とに親しまれています。それらの品々  
をどうぞ御清覧ください。

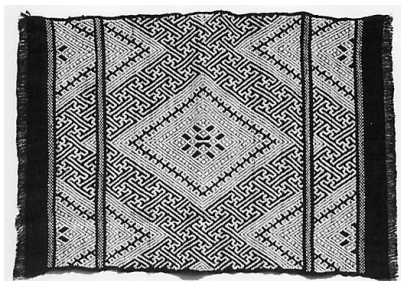
協賛出品 青森 つがる工藝店

仙台 光原社 秋田 海青舎

## スライド茶話会

十月二十三日(土) 午後六時から、  
秋田の手仕事と風景を観るスライド茶  
話を開きます。

お気軽にご参加ください。



刺こぎん テーブルセンター (青森県)



樺細工 茶筒 (秋田県)



吹きガラス ワイングラス (秋田県)



川連漆器 小箱、片口 (秋田県)



曲げわっぱ 小判弁当 (秋田県)



鉄器 端広鉄瓶 (山形県)



古白岩焼 かめ2種 (秋田県)



十文字和紙 条幅 (秋田県)



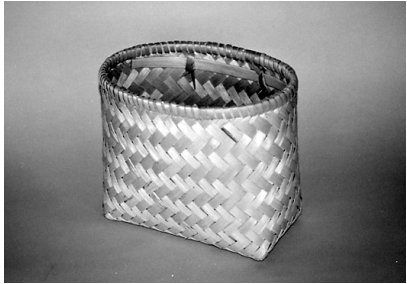
竹細工 肥料ふりかご (宮城県)



ブドウツル細工 手提げかご2種 (秋田県)



竹細工 手付き椀かご (青森県)



イタヤ細工 かっこべ (秋田県)



アケビ細工 手提げかご (秋田県)



竹細工 盆ざる、盛かご (青森県)



アケビ細工 平かご (秋田県)



アケビ細工 花入れ (青森県)



津軽凧 巴御前 (青森県)



津軽凧 旭日に鶴 (青森県)



津軽凧 那須与一と官女 (青森県)



伊達げら (青森県)



御神酒口 三重松 (青森県)



玩具 蕪づくり (青森県)

たくみアーカイブス

## 東北の手仕事と民藝運動・逸文

志賀 直邦

民藝運動の具体的な発足については、  
 えば、大正十五年（一九二六）四月の、  
 柳宗悦、富本憲吉、河井寛次郎、濱田  
 庄司の連盟による『日本民藝館設立趣  
 意書』の発表が第一歩であった。（そ  
 の活動の事務、会計は青山二郎、石丸  
 重治、内山省三が担当したという）

さらに翌昭和二年（一九二七）、柳  
 は『工藝の協団に関する一提案』を発  
 表、新作民藝品生産の実践に対するひ  
 とつの指針を示した。またその年四月  
 創刊の雑誌「大調和」（武者小路実篤  
 編集）に、柳は書き下ろしの論考『工  
 藝の道』を九回にわたり連載したが、  
 これを朝鮮渡航の船中で読んで心を打  
 たれたという芹沢銈介はじめ長野の小  
 林多津衛、三代沢本寿、弘前の相馬貞  
 三ら、地方在住の有為の青年たちが、  
 いずれも志を立て、のちにそれぞれ民

藝の運動に参画したことも特筆されて  
 いい。彼らの多くはかつて雑誌「白  
 樺」の読者であったという。

### 御大札記念国産振興博覧会のこと

昭和二年、民藝の後援者であった山  
 本為三郎（大日本麦酒会社社長）と工  
 政会の倉橋籐治郎の斡旋で、柳たちは、  
 上野公園で開催される、かつてない規  
 模の博覧会に『日本民藝館』という名  
 のパビリオンを出陳することになっ  
 た。

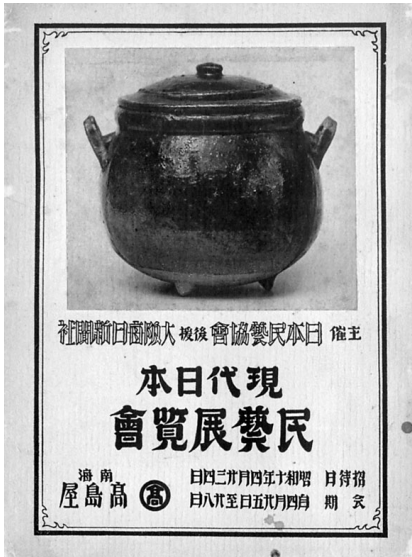
この建物は、柳、河井、濱田、リー  
 チの協同設計により、用材と大工の棟  
 梁は浜松の素封家高林兵衛の世話に  
 よった。高林はこののち、昭和五年四  
 月に、自邸を提供して、柳の蒐集品に  
 よる「日本民藝美術館」を開設したこ  
 とで知られる。

因みに江戸時代中期の建築として知  
 られ、柳も称賛したという高林邸が、  
 その二年前の昭和三年、志賀直哉の編  
 集顧問により座右宝刊行会から出され  
 た日本建築・庭園写真図集『聚楽』に  
 桂離宮、修学院離宮、大徳寺、三溪園  
 などとならんで、数葉の写真が掲載さ  
 れていることはもつと知られている。

さて、この上野での『日本民藝館』  
 については、のちにこの建物を引き取  
 り「三国荘」と名付けた山本が、『民  
 藝六四号』（昭和三三年四月号）に詳  
 しく書いてるので参照しよう。

「この民藝館を建てるに際して、同  
 志の意気込みは大したもので……：什器  
 類も各地から集めるために、柳、濱田、  
 河井の諸君は東北から北陸の各地へ、  
 また翌年は京畿、山陰、中国、九州の  
 果てまでも、買い物に歩き回った。こ  
 の旅で先生方は各地の物産に対し、大  
 いに見分を広くしたものです。」

地方民藝品の調査と集荷を計画的に  
 行つたのはこのときが始めてであつ



『現代日本民藝展覧会』図録表紙

次頁8葉の小間絵（芹沢銈介）と説明書きは同図録による。

集の年譜によれば  
青山は昭和二年

た。  
なお青山二郎文  
民藝教団出品の工  
藝品などであつ  
た。  
かバーナード・  
リーチを含めた同  
人作家の作品や、  
黒田辰秋、青田五  
良ら京都の上加茂  
民藝教団出品の工  
藝品などであつ  
た。

であった雑誌『工藝』が創刊された。

このあと柳は翌年春まで、朝鮮京城  
や京都での展覧会や執筆、出版など多  
忙な日々を過ごす。そして四年四月  
二十二日、柳は濱田庄司とともにシベ  
リア経由でのヨーロッパへの旅に発  
つ。そして翌五年七月に帰朝するが、  
柳不在の間にも地方の民藝の調査、収  
集、展示会などが同人たちの協力に  
よって進められていたことが、彼らへ  
の柳の書簡によっても判るのである。  
さて、六年一月、かねてからの念願

た。東北地方については二年（一  
九二七）十二月二十一日に上野を夜行  
で発つて、二十二日仙台、二十四日盛  
岡、二十五日浅虫温泉、二十六日青森、  
二十七日弘前から秋田へ、二十八日は  
酒田、二十九日、三十日と柏崎、会津  
を経て「新津に着きは夜十一時過ぎ。  
元旦を汽車の中で祝い、」と柳の記録  
にある。

で販売された。この民藝館のスポ  
ンサーでもあった山本為三郎によれば  
「高取の大鉢、出雲の日の出団扇、日  
田皿山（小鹿田憲）の焼き物、秋田の  
岩七輪、益子の山水土瓶、八丁牟田の  
花筵、琉球の漆器、朝鮮の紙類やすだ  
れなどで、青山二郎君なども進んで売  
店担当をし、大盛況の様子でした。こ  
れが各地の民藝品を集めて世に紹介し  
た最初の企てであります。」とある。  
民藝館に展示され、あるいは販売さ  
れた品は、このほ

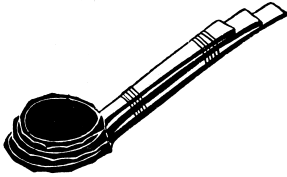
十二月、翌年行われる「御大礼記念国  
産振興博覧会」の事務嘱託の辞令を受  
ける。と記されている。民藝同人の仲  
間では青山はよほど事務の才能がある  
と認められていたのかもしれない。  
**雑誌『工藝』と同人たちの活動**  
前項の上野公園における博覧会の協  
賛行事は、昭和三年（一九二八）三月  
二十四日開館し、五月二十七日に終了  
した。

その第一号と第二号は青山二郎と石丸重治(英文学者・「英国の工藝」を著す)が編集にあたった。第三号からは柳宗悦自らが編集の責任をとった。

この『工藝』は月刊で、一二〇号まで出された。その内容について詳しくふれる余裕はないが、ここでは運動の本来の使命である新作民藝の調査、蒐集、育成普及の成果としての総合図録報告書というべき二冊について記したい。ひとつは第三九号(昭和九年三月号)で、この年三月十二日から八日間にあわたって上野松坂屋で開かれた「現代日本民窯展覧会」(地方窯の陶器の



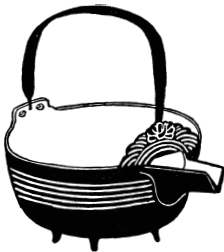
岩七輪 羽後阿仁



杓子 羽後酒田



明神堂 睦前堤



口鍋 睦中軽米

会)の図録ともいふべき特集号である。もうひとつは第四七号(九年十一月号)で、これはやはり十一月十九日から日本橋高島屋で開催された「現代日本民窯展覧会」の図録である。二つとも調査報告など本文は、柳をはじめ民藝協会のそうそうたる同人が当った。写真図版はそれぞれ数十葉、とりわけ後者は芹沢銈介による迫真の描写による小間絵数百数十点に加え、詳細な目次と、材料、産地別の民藝品索引を添え完璧を期した。その点で後の、柳宗悦書き下ろしによる「手仕事の日本」とは若干性格を異にする。

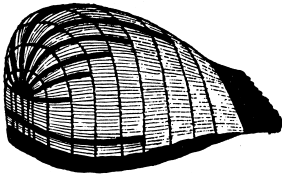
このときの会の顧客への案内状が残されているので、以下に抄録しよう。「今年の夏、七月以来三カ月余りにわたり、北は青森から南は薩摩へかけて、日本民藝協会の方々が各地を手分けして巡歴せられ、現存する各地方の手工品で、隠れたる美しさを持つ民藝品の蒐集を企てられました。その結果として千五百余种、点数にして一万数千点を得られ、ここに空前の大展覧会を開催し」と記し、「さらにこうした素朴で健康な美しさを持つ民藝品はやがて姿を消すべき運命の途上にあるものが大部分であります。これに新しい



顧客と用途を与えてその復活の途を開くことは、目下の急務として叫ばれている農村の貧困問題にも少なからず影響するに相違ありません。」と書いている。

ところで、昭和九年の民藝協会同人による調査と集荷の活動は、八年十二月の東京たくみの開店とも連動して、東北地方でも多くの協力者を生んだ。それについて以前に岩手県御明神の篤志家、南野久左衛門からいただいた手紙を紹介したい。

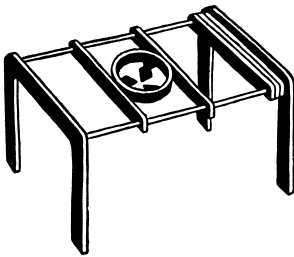
「昭和九年は東北地方の大冷害で翌る十年に三井、三菱より義捐金を頂き、



にぞ 羽前米沢



鉄瓶 羽前山形



吉原五徳 羽後秋田



片口 睦中浄法寺

青年団で共同作業場を建て、(金参百円にて建設)、その頃私は第二分団長に推され、御明神共同作業場の管理をする事になりました。その際岩手県工芸指導担当の吉川保正先生(技師)に楮皮利用についてご指導戴いた事があります。」南野さんはその後、終生にわたって地域の農業と、その副産物としての手仕事の振興に尽くされた。

吉川氏の指導も含めて伝統的な手仕事をこんにちに活きた新作民藝品に育てようという民藝運動による成果の一端は、楮皮のシオルダーバッグやマツト、蓑の襟飾りの矢羽根の模様を生かしたクッションなど、多くの製品見本として残され、現在雫石町御明神の地域振興センターに保存展示されている。

### タウトと国立工芸指導所・

### ペリアンと雪害調査所のこと

昭和の初期、民藝運動の発足と前後して、ドイツのパウハウスで学び、あるいはグロピウスや、ル・コルビュジエらの仕事や思想に影響を受けた建築家やデザイナーたちがいた。山脇巖、前川国男、坂倉準三、柳宗理、剣持勇などであった。

昭和十二年(一九三七)、坂倉の手がけたバリ・万国博覧会の日本館が、建築部門のグランプリを受賞した。それは坂倉の意図の如何にかかわらず、伊勢神宮や桂離宮に代表される直線的構造と平面の開放性が、まさに日本的な美として評価されたのであった。こうした日本美に対する見方は、当時の日本主義への回帰傾向もあって、国内でも容認されるようになっていた。

広く知られていることであるが、昭和八年(一九三三)五月、シベリア經由で来日したブルーノ・タウト(ドイツの建築家)もまた桂や伊勢を称賛している。その年十一月、タウトは仙台の国立工藝指導所に囑託として赴任し、所長の国井喜太郎らの案内で、仙台近郊の農村を訪れたさい、景観も茅葺の農家も、ドイツの田舎とまったく同じように美しく豊かであると記している。

タウトに課せられた役割は、工藝指導所で試作している欧米への輸出用生

活雑貨のデザインへの助言であった。だが日本的な良さよりも、欧米の流行の摂取にこだわる国井所長との意見の相違もあって、タウトは指導所を辞職するにいたる。

ところでタウトは、三年半にわたる日本滞在の間多くの日本人と交わり交遊を深めた。とりわけ柳宗悦をはじめ河井寛次郎、濱田庄司、富本憲吉や、来日中であったバーナード・リーチとの忌憚のない交流についてはいずれ稿を改めたいと思う。

さて第二次世界大戦勃発を契機に外貨獲得の要に迫られた政府は、欧米への輸出規制に触れない雑貨の輸出を促進すべく、またも外国のデザイナーを招致することにした。そして白羽の矢が立ったのがル・コルビュジェの弟子であったフランスの気鋭のデザイナー、シャルロット・ペリアンであった。

ある研究者によると、商工省貿易局課長水谷良一から柳宗理、坂倉準三へ

と相談が流れて来日が実現したということらしい。因みに水谷は戦前の柳宗悦の活動において、友人として、また役所の立場から惜しみのない助力をした恩人ともいふべき一人であった。

昭和十五年八月、来日したペリアンはまもなく、柳宗悦の紹介で東北へ向かう。彼女は仙台の工藝指導所を足場に仙台、山形、秋田の各地で農村の工藝指導を行うが、とりわけペリアンとの共同作業としてこんにちまで記憶される大きな成果を生んだのが、山形県新庄に設置された、農林省の積雪地方農村経済調査所(略称雪害調査所)のスタッフとの仕事であった。

七ヶ月後、彼女は東京と大阪の高島屋で催された『伝統・選択・創造』というタイトルの展覧会を最後に与えられた仕事を終える。しかしその足跡は東北の民藝にいまなお大きく輝いているのである。この詳細は新庄の雪の里情報館の活動も含め、あらためて紹介したいと思う。

## クモシカリ

三浦 正宏

平成二十一年三月、秋田市太平と仙北市角館町の箕作りが「秋田のイタヤ箕製作技術」として国の重要無形民俗文化財に指定された。この指定は文化財保護法に規定する「生活や生業を理解するために欠かせない日常生活用具の製作技術」に該当する。国の重要無形民俗文化財は平成二十一年現在で全国に二百六十四件、秋田県では「イタヤ箕製作技術」が十五件目で全国最多を数える。

この指定産地をもう少し詳しくいえば、太平は黒沢地区であり、角館は雲然地区である。今回の指定では二つの産地の箕を「秋田のイタヤ箕」と呼んで一つにしているが、黒沢と雲然の箕作りにはいくつかの違いがある。

イタヤの箕は、イタヤカエデを横材

にして、フジツルを縦材にして成形する。これを黒沢では「箕を作る」といって、雲然では「箕を織る」という。またイタヤの部材を、黒沢ではツクリギ（作り木）と呼び、雲然ではクサ（草）と呼ぶ。雲然の近隣にはイタヤの部材をミツル（箕蔓）とも呼ぶところもある。また雲然ではカッチャコガタナ（刃が逆さに付いた小刀）という面取り用小刀を使うが、黒沢にはない。黒沢ではマキリと呼ぶ普通刃の小刀を使う。箕の種類でいえば大箕、中箕のほか、黒沢ではツガル（津軽）箕を作り、雲然ではカミウリ（上売り）箕を織る。

ツガル箕は青森県向けの箕のこと。カミウリ箕は、雲然からみた上方（山形、宮城）で売る箕のことである。そして、雲然では女性も箕を織るが、黒沢では女性には箕を作らない。

さて、角館の雲然は「クモシカリ」と読む。不思議な発音の地名である。雲然は山あいの土地で、近くを松木内

川、入見内川、玉川が流れている。ナイ（内）は川を意味するアイヌ語であるから、この川に囲まれた雲然もアイヌ語起源の地名と思われる。

アイヌ語で魚の干棚を「クマ」、川が回流する所を「シカリ」という。雲然はアイヌ語でクマ・オ・シカリ（魚の干棚が・たくさんある・川が回流する所）と読むことができる。

そのむかし蝦夷（えみし）と呼ばれたアイヌの人たちの時代、この土地はサケの大漁に恵まれ、川原にはサケを掛ける干棚が幾重にも並んでいたのではないだろうか。

ちなみに、イタヤカエデはアイヌ語で「トベニ」と呼ばれ、里山の沢沿いに戸部や砥部、飛内などの地名で残っていることがある。

秋田では、手仕事のあるところには決まってアイヌ語地名がある。手仕事地図とアイヌ語地図は重なっている。

（いわな文芸会員・秋田市）

## 『手仕事の日本』いま(二)

それらは作られ、使われる地域によつて、材料、用途、形態や造形表現などに多様な特色がみられる。それを柳は日本の自然の豊かさ、古くからの歴史から学んだ先人の知恵に求める。

たとえば東北地方だけを見ても、柳は、青森県二一点、岩手県三四点、秋田県二二点、宮城県二二点、山形県四七点、福島県一六点、合計一六一点をとりあげているが、同じ東北でも積雪の多少、海沿いと内陸、城下町と山



『手仕事の日本』表紙

漁村などでは生活環境が異なる。そこそ村、あるいは郡部ごとに、箆、かご、蓑、箕、笠、箒、木製品、鍛冶物など素材、形態に違いがみられるのである。それはすべて土地で採れる材料を用い、用途に即した仕事だからである。

柳の執筆の時からちょうど五十年後の再調査では、柳本記載の手仕事は、すでに半分が失われていたと思う。だが、手仕事や民藝の再生は、古き良き時代のそれをよみがえらせるだけではなく、今の時代に人びとに愛され、ふだんの生活の中で使われる品々を生み出すことであろう。

ところで現代日本の手仕事・民藝品の総合図録として、最初に柳によつて刊行されたのは、「手仕事の日本」上梓の十二年前、「現代日本民藝展覧会・記念号」と題する雑誌「工藝」四十七号であった。これについては別項に記したい。

(志賀直邦)

## あとがき

今年の夏は史上まれな暑さであった。野菜や果物の作柄も、そして海の魚介類の漁獲状況も例年とは違った。それは地球の温暖化ということだけではなく、もつと複雑な原因も予測されるという。今年の冬は厳寒たというのだ。

江戸時代後期になるが天明三年(一七八三)、浅間山の噴火で関東から東北にかけて大冷害となり、天保年間(一八三三〜)には山背風が吹いて東北一帯が冷害になり、何十万人の餓死者を出し、百姓一揆も多発して幕府の根幹を揺るがしたという。そのようなことがまた起きたとき、果たしてわれわれにその備えがあるのか。江戸幕府が安政の大地震(一八五六)でついに財力を使い果たし、薩長に屈したことを忘れてはならない。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―一―二〇一七

FAX 〇三―三五七―一―二二六九

振替 〇〇―一〇―一―三五六五九

定価 六〇円(税込)